

# ゲルツェンとイギリスの協力者たち

今 井 義 夫

## A. I. Herzen and His English Associates

Yoshio IMAI

The Russian political thinker, A. Herzen emigrated to England in 1852 founded his "Free Russian Press" in London. During his stay in London until 1865, he was helped by some English people. These included the leading Chartists W. Linton and E. Jones who helped to promote his appearance in English publications and the public meetings of the international labour movements in London.

He had quite close connection with those English companions however we can find few records about them in his famous memoirs *Past and Thoughts*, in which he mentioned mainly the names of Thomas Carlyle and Robert Owen as his English acquaintances.

Between 1968~1970, the author of this paper tried to trace the activities of Herzen in England. Professor M. Partridge, Nottingham University, kindly helped the author's work in England and gave him advice and off-prints of her articles on this subject.

This paper was originally written as the draft of the author's report at the 23rd annual meeting of the Japanese Society of Western History (The Nippon Seiyoshigakukai) on 20th May 1973 in Tokyo.

## は じ め に

この小論は1973年5月18・19両日に東京・お茶の水女子大学において開催された日本西洋史学会第23回大会の近世史部会の19日の報告会で筆者が「ゲルツェンとイギリスの協力者たち——M・パートリッジ教授の労作をめぐって——」と題して行った報告の原稿にもとづいている。<sup>1)</sup>

ただし今回ここに発表するに当っては、その後修正した部分や当日、報告時間の制約によって省略せざるを得なかった部分の加筆がなされている。

### (一)

私はこのテーマを19世紀におけるロシアとイギリスの交流史の一駒としてとりあげてみたいと思います。

19世紀半ばのロシアの政治思想家・文筆家・アレクサンドル・イワノヴィッチ・ゲルツェン(Александр Иванович Герцен, 1812—1870)は単にロシアの思想家としてのみでなく、友人のニコライ・オガリョーフやミハイル・バクーニンらとともに当時のヨーロッパで活躍した国際的な人物の一人として知られています。彼らの足跡をたどることは当時ロシアと西欧の文化的交流の一側面を明らかにし、そのなかでロシアの社会的運動とその思想の国際的意義をたしかめるにも必要な作業だと考えられます。

ここでは従来わが国で論じられることの少なかったゲルツェンのイギリスにおけるチャーティストやその他の急進派の人たちとの交渉について近年のイギリスにおける研究と私自身の在英中(1968年～1970年)の調査とにもとづいてその事実関係を報告し、あわせて若干の社会思想的な考察を試みたいと思います。

ゲルツェンが家族とともにロシアを去ったのは1847年の1月でしたが、その後1870年にパリで病死するまで、彼は西欧各地に自由な活動の地を求めて転々と移り住みました。彼がパリからロンドンに渡ったのは1848年の革命後の反動期で、クーデターによってルイ・ナポレオンがフランスに君臨した翌年の1852年の8月でした。それ以後1865年にいたるまでの12年間余をゲルツェンはロンドンを中心に住んで、そこに集る多くの亡命政治家たちと接触し、とりわけ彼の「自由ロシア出版所」の設立と運営に尽力します。

この期間のゲルツェンとオガリョーフのイギリスでの生活とその資料について私は別の機会にイギリスで試みた調査について発表したことがあります。<sup>2)</sup> そこでもふれたことですが、12年余にわたる在英時代を通じてゲルツェンがどのようなイギリス人たちと交際したかということは、彼自身の有名な自叙伝的作品『過去と思索』のなかでもカーライルやロバート・オウエンなどを別としてその名もあげられておらず、また本報告でとりあげるパートリッジ教授の第二次世界大戦後の一連の研究が発表されるまでは研究者たちの間でも本格的にとりあげられていなかった問題でした。とくに、ゲルツェンが当時、イギリスでの活躍を通じて密接な関係をもったはずのチャーティストや急進派の人々についての記述は『過去と思索』のなかでは一切言及されていません。1933年に書かれたE・H・カー教授による古典的なゲルツェン伝記『浪漫的亡命者たち (The Romantic Exiles)』のなかではゲルツェンと亡命者たちとの関係が中心でこれらイギリス人協力者たちとの関係についてはほとんどふれられておりません。またソビエト時代の代表的なゲルツェン研究家エリスベルクによる伝記のなかでもとくに詳しい叙述は見当りません。

パートリッジ教授はイギリスにおけるゲルツェン研究家として知られていますが、その戦後の研究発表の主な部分がこの問題に捧げられています。<sup>3)</sup> 同教授によって、従来とりあげられなかったゲルツェンとイギリス人たちとののかかわりについての具体的事実が堀りおこされ、その結果、両者の間の関係は『過去と思索』を読んで知られる以上に密接であったことがわかりました。とりわけ、ゲルツェンがイギリスでの活動に当って当時のチャーティストたちや急進的な人たちの協力を得ていたことや、彼の執筆活動がイギリスの読書界で得た反応などが明らかにされました。

私は在英中にゲルツェンをたずけたイギリス人のうちとくにチャーティストのリントンを中心に、その足跡や資料をしらべました。また、幸い、ノッティンガム大学のスラヴ研究部門の主任であったパートリッジ教授に会いその研究室で種々の助言を得る機会に恵まれました。以下の報告はそれらの資料と調査にもとづく一つの中間報告ともいふべきものです。

## (二)

ゲルツェンのロンドン到着当初からイギリスにおける彼の活動をたずけたのはチャーティストで木彫版画家として知られたりウィリアム・リントン(William J. Linton 1812—1897)でした。私はゲルツェンと最も密接な交渉のあったイギリス人はこのリントンではないかと考えています。

ゲルツェンは1852年の1月にロンドンに亡命の地を求めて来る前にリントンとはすでにパリでイタリアの亡命政治家マッティーニを介して面識がありました。そして、ゲルツェンのロンドン到着早々にリントンは自ら編集にたずさわっていた週刊雑誌『リーダー (The Leader)』誌にロシアに関する時事評論の執筆を依頼し、掲載しました。この雑誌は当時ジョージ・ヘンリー・ルイスらがいわゆる哲学的急進派 (philosophical radicals) の雑誌として “The organ of the religions and social reformers” と銘うっていましたが、リントンはこの雑誌の海外欄の編集責任を委託されていたのです。

ゲルツェンのイギリスにおけるデビュー論文ともいべきこの『リーダー』誌上の評論は「ロシアの奴隷制 (The Russian Serfdom)」という題で1853年末に英訳されて掲載されました。このような標題が選ばれたわけは、丁度その頃イギリス国内でアメリカの黒人奴隷制の廃止を訴える巡回講演をして歩いていた女流作家のストウ夫人 (Harriet Beecher Stowe) の反響が大きかったからです。ゲルツェンはこのような状況のもとでイギリス人たちにアメリカよりも近いロシアにおける農民の奴隷状態について訴えて彼らの関心を呼びおこそうと考えたのです。この評論のなかでゲルツェンはロシアの農奴制を白人奴隷制と呼び、そのもとでのロシア農民の窮状を訴えるとともに、当時彼がハクストハウゼン (August von Haxthausen) のロシア農村調査報告から影響をうけて積極的に評価しはじめていたロシア農村共同体の存在についてヨーロッパの読者たちの注意をうながそうと試みています。ゲルツェンはそれをまだ資本主義的な悪影響をうけていないロシアの農村において専制政府と農奴制のもとでも崩れない民衆の自治的共産制共同体として未来のロシアに社会主義を保障する民族的基盤であると考えたのです。<sup>4)</sup>

リントンはその後『リーダー』の編集から離れ、レイク・ディストリクトのコーニストンのブラントウッド (Brantwood, Coniston, Windermere) に移り住み、そこに自らの印刷所をつくって『イングリッシュ・レパブリック (The English Republic)』という定期刊物や各種のパンフレットなどを発行します。そのなかにはゲルツェンの書いたミシュレ宛の公開状「ロシア民族と社会主義」の英訳なども含まれていました。また『イングリッシュ・レパブリック』の誌上にはリントン宛の手紙の形式でゲルツェンが書いた論文「ロシアと古い世界 (Russia and The Old World)」が英文に訳されて載せられました (1855年Ⅲ号)。その内容はミシュレ宛の「ロシア民族と社会主義」その他の論文をイギリスの読者向けにアレンジしたもので、古い世界——すなわち西欧のゆきづまりと、これに代る新しい世界としてのロシアの可能性を



論じたものでした。ゲルツェンはここでもロシアの農村に現存する伝統的な共同体をロシアにおける共産主義的未来の基礎であるとする彼の主張をくりかえし強調しています。

以上のようなリントンによるイギリスの読者への紹介以外にもゲルツェンの文名をイギリスでたかめたものとしてはすでにドイツ語で出版されていたゲルツェンの回想録の初巻『牢獄と流刑』（1854年）の英訳出版があります。その内容はゲルツェンが青年時代にロシアにおいて逮捕・追放をうけた体験にもとづく記録ですが、折しもクリミア戦争のぼつ発に当って西欧の読者にとって知られざるロシアの政治的裏面を紹介する生々しい記録として歓迎されたのです。

こうして、ロンドン到着の頃はイギリスではほとんど知られなかったロシアの亡命思想家ゲルツェンは1854年には当時の有力誌『ウェストミンスター・レビュー（*The Westminster Review*）』から執筆依頼を受けるまでになっていました。ゲルツェンの論文や著作にたいするイギリスのジャーナリズムの反響についてはパートリッジ教授がその調査を発表していますが、一般にイギリスの批評家たちはそれをロシアの社会や政治についての新知識として歓迎しながら、反面、彼の社会主義的主張や煽動的な傾向は受け入れ難いものとして保守的批評家からの批判をうけていたということです。<sup>5)</sup>

ゲルツェンがとくにイギリスの読者向けに執筆した論文はリントンを介して発表された上記の二論文にとどまりました。この頃彼のロシアにおける農奴解放運動の動きへの期待とその事業への自己の使命感がにわかにたかまり、彼は自らの印刷所「自由ロシア出版所」を設立して専らロシア向けの出版物の執筆に多忙を極めるようになったのです。

ゲルツェンにロンドンでの国際的な解放運動に参加するきっかけを与えたのもリントンでした。すでにロンドンに滞在していた旧知のマッティーニもゲルツェンに亡命政治家仲間に紹介の労をとりましたが、リントンによってゲルツェンはロンドンで生れてはじめて国際的な集会の席上で演説する機会に恵まれました。それは1853年11月29日にロンドンで開かれたポーランド蜂起第23周年記念集会のことで、この集会はリントンやポーランドの亡命者たちが中心になって組織し、チャーティストたちや各国からの亡命政治家たちを招待したのです。

この集会の席上、ゲルツェンはロシア人代表として演説しましたが、その冒頭でとくに聴衆に向って自分は言論の自由のない国で育ったためにかつて公衆の面前で演説

した経験がないので原稿を手にしたまま話すのを許してくれとことわっています。ゲルツェンは当時まだ英語で書いたり話したりすることはできなかったので、演説はフランス語で行われました。

「ポーランドの独立とロシアの自由万才」という言葉でゲルツェンはその演説を結びました。ゲルツェンにとってポーランドの独立とロシアの自由のための事業は不可分の関係にありました。この原則にあくまで忠実なゲルツェンはそれから10年の後1863年のポーランド人の反ロシア暴動に当たってもそれを支持することによってロシアの世論からは全く孤立することにさえなります。

さて、この集会でのゲルツェンの演説につづいてリントンがイギリス人を代表して演説し、ついでフランス人代表のアーノルド・ルーゲとドイツ人代表の演説が行われました。この時のゲルツェンの演説の内容はアーネスト・ジョーンズ(Ernest Jones)によって彼の発行していた『ピープルス・ペイパー (*The People's Paper*)』に掲載され、ゲルツェンはこれを機会にこのチャーティスト運動の左派の指導者とも知り合うことになりました。ジョーンズとの交渉については後にさらにふれます。

### (三)

ここでリントンと当時のチャーティスト運動の関係について簡単にふれておきましょう。

周知のようにチャーティスト運動 (Chartist movement) はイギリスにおける全国的な労働組合結成をめざす運動が1834年のトルパドル事件 (Tolpuddle Martyrs) に象徴される政府の弾圧策によって挫折した後をうけて1838年から1850年代はじめにかけて労働者の参政権実現を中心とする諸要求「人民憲章 (People's Charter)」をかかげてイングランドのみならずウェールズやスコットランド、アイルランドにもひろがった全国的な大衆運動でした。

この運動の発足にあたって指導的な役割を果たした「ロンドン労働者協会 (The London Working Men's Association)」は協同組合運動や労働組合運動に熱心な労働者や中産階級出身者たちによって組織され、その主な指導者としては、ラヴェット (William Lovett) やヘンリー・ヘザリントン (Henry Hetherington)、ジェイムズ・ワトソン (James Watson)、ロバート・ハートウェル (Robert Hartwell)、フランシス・ブレイス (Francis Place) などが名を連ねております。このグループの活動方針は主として労働者のための啓蒙活動を言論・出版を通じて行うことで、その勢力はオウエンの影響の強いロンドン、バーミンガムなどの南部都市地域にありまし

た。

これに対抗してより急進的な活動方針をかかげたグループが北方パークシャ、ヨークシャの工業地帯の賃銀労働者を基盤として形成され、次第にチャーティスト運動の主導権を獲得してゆきます。前者が言論派もしくは道徳派と呼ばれたのにたいしてこのグループは実力派と呼ばれる革命の実践的な傾向を特色としましたが、その指導者としてはアイルランド出身のジェイムズ・オブライエン (James O'Brien) やファergus・オコンナー (Feargus O'Connor) および彼らと緊密な ジュリアン・ハーニー (Julian Harny) などで、「ロンドン民主協会 (The London Democratic Association)」を結成しました。

リントンの回想録によりますと、<sup>6)</sup> 彼はゲルツェンと同じ1812年にロンドンのイースト・エンドの一角に生れ、木版画の徒弟時代を経て、後に『挿絵ロンドン・ニューズ (Illustrated London News)』などへの挿絵版画で版画家としてまず名を成しました。徒弟時代にチャーティストのジェイムズ・ワトソンが出版した大衆啓蒙用の廉価版の出版物でゴドウィンやペインやオウエンなどの思想を学びチャーティスト運動に近づきます。当時、彼にこの面での影響を与えたのはロンドンの印刷業者であったチャーティストのヘンリー・ヘザリントンや同じ版画家でもあったリチャード・ムウア (Richard Moor) などでした。これらの彼をとりまく労働者や手工業者たちははじめにもふれたように「ロンドン労働者協会」の中心的な推進者たちでしたから、その影響のもとに彼もこの組織に属して活躍を開始します。

リントンはこの間、必ずしも目立つ指導者ではありませんでした。チャーティスト運動史の古典的文献であるガメイジの書物にも、D. G. H. コール教授のチャーティスト列伝にも彼の名は見当りません。わずかにM. バアのイギリス社会主義の歴史や戦後の A. ブリッグズ編の『チャーティスト研究』の一隅に名を見せているにすぎません。<sup>7)</sup> しかし、彼のチャーティストとしての活動は当時にあつては国内的にも国際的にも注目すべき役割を果たしており、私は彼をいわばチャーティスト運動を支えた中堅的活動家の一人であったと考えます。

彼の活動をその性格から大きく二つに分けることができます。第一はイギリス国内での大衆むけの啓蒙活動で、第二はイギリス国内の政治的亡命者をふくめた国際的な活動です。

第一の種類の活動にたずさわったのは彼がロンドン労働者協会系の人々からの影響をもっとも強く受けていたことにもよるのでしょう。

1839年には自力で大衆啓蒙用の『ナショナル (The National)』と題する文集を発行して、彼が単に挿絵版画家としただけでなく編集者として、また文筆家としての才能をもつことを示しました。この文集は各号の扉絵に彼自身によるみごとな版画をかかげています。また、そこに収録されている、シェークスピア、ミルトン、ヴォルテール、ペイン、ロベスピエール、プリーストリ、ジェファースン、フランクリン、シェリー、コールリッジ、ゴドウィン、メアリー・ウルストンクラフト、オウエン、ワトソンなどの作品からの抜粋によってリントン自身の若い時期の読書と思想傾向を知ることができます。彼はこの文集に「人民のための一つの図書館 (A Library for the People)」という副題をつけ29号まで発行しました。

その他、1831年以来の政府による大衆向けの政治的出版物への抑圧策に対抗して友人のリチャード・ムウアが発行していた『プアーマnz・ガーディアン (The Poor Man's Guardian)』の出版にも協力しました。ゲルツェンが渡英してきた1852年当時はいわゆる「哲学的急進派」の雑誌『リーダー』の編集に参加していたことは先にもふれましたが、やがてこの雑誌の所有者の意図が彼の期待するところと異なることを知ってからは編集を辞して、自分自身の個人印刷所をブレントウッドに設けて、そこから『イングリッシュ・レパブリック』などをふくめた多くの印刷物を発行しました。彼がこの印刷所からゲルツェンの論文の英訳版を発行したことも先に述べた通りです。

私はこのようなリントンの自主的な出版活動がおそらくゲルツェンを刺戟して、やがて彼の「自由ロシア出版所」をロンドンに設立する決心をつけさせたのではないかと考えております。ゲルツェンがロシアの解放運動のための出版活動のために自由な印刷所をロシアの国外に設けようと着想したのはイギリスに来る以前からのことでしたが、ロンドンに着いて翌年の1853年にその実現にふみ切ったのは、それまでの間、自己の印刷所によって彼の論文の印刷を助けたリントンからの影響を考えるのは極く自然でありましょう。彼の影響についてはゲルツェンがこの「自由ロシア出版所」から発行したロシア向けの印刷物の編集方針が読者の自由な精神の発表の場としての紙面を提供するという点で当時リントンが編集していた『リーダー』誌の編集方針と同じ傾向を示していたことをパートリッジ教授は指摘しています。<sup>8)</sup>

ついでに、ゲルツェンがこの「自由ロシア出版所」から発行したロシア向けの定期刊行物『北極星 (Полярная звезда)』の表紙をかざるデカブリストの五人の肖像を並べた版画は、ほかならぬリントンによって彫られたものであったことを指摘しておきましょう。このことについては、すでに私自身が別の報告のなかでふれておりま

す。<sup>9)</sup> 念のために申し添えますと、ゲルツェンのこの文集『北極星』の名称はデカブリストたちの文集の題名を受けついでのものであり、当時のチャーティストたちの雑誌『ノーザン・スター』からの影響ではありません。

さて、リントンのもうひとつの活動面である国際的な解放運動との連帯のための組織活動を取りあげて見ましょう。

チャーティストたちがヨーロッパ大陸諸国における解放運動との連帯に関心をもちはじめたのは国内での運動の行きづまりが目立ちはじめた1840年代に入ってからだといわれます。チャーティストたちの1839年7月と1842年5月の二回の議会への請願署名運動がともに失敗に終ると運動は衰え、1848年の恐慌やフランスにおける二月革命の刺激によって三たびの昂揚期を迎えるまでは停滞期ともいうべき時期でした。この時期にチャーティストたちは従来、国内運動にのみ向けられていた関心と運動への反省から海外からの亡命政治家たちとの連帯を積極的にとりあげます。

1845年9月にはチャーティストの機関誌『ノーザン・スター』の編集者ハーニーやトマス・クーパーらの左派の指導的人物たちがマルクスやワイトリングらの同意を得て「友愛民主主義者協会 (The Society of Fraternal Democrats)」と称する国際的な労働運動の連帯組織を発足させています。他方、1847年にはマツィーニのイニシアティヴでロンドンで「人民国際連盟 (People's International League)」<sup>10)</sup> が結成され、各国民の相互理解やその民族的自治や独立の促進のための世論への働きかけを目的としてかかげました。これにはかつての「ロンドン労働者協会」系のチャーティストの参加も多く、リントンはその名誉書記に選ばれています。

1848年2月の革命でパリに臨時革命政府が成立するとこれらロンドンのこの二つの国際組織に属するチャーティストの間からそれぞれロンドンの労働者のメッセージをたずさえた代表者がパリに派遣されますが、前者からはハーニーらが、後者からはリントンらが選ばれています。フランス語に通じていたリントンはこの時にパリで国会議員のラムネや臨時政府の閣僚で社会主義者のルイ・ブランや作家のジョルジュ・サンドと親しくなりました。

1848年の革命後の退潮期にチャーティスト運動もまた転換を迫られますが、その解体の過程でリントンはマツィーニたちの新たな国際的共和主義者組織に参加します。1850年にロンドンで発表された「中央ヨーロッパ民主委員会 (The Central European Democratic Committee)」がそれです。その宣言文はマツィーニ、ルドロン・ロラン、アーノルド・ルーゲ、アルバート・ドラツの四名が名を連ねていますが、

リントンもこの有力なメンバーであったようです。その宣言文は「自由・平等・友愛・連合」という共和主義的な理想をかかげて神と真理にもとづく道徳的な法の存在と人間性の進歩を信じ、平和的な手段でその実現をはかることを目指すと述べています。それはリントン自身が記述しているようにもはや政治的な党派ではなく、むしろ宗教的性格をもった団体といってよいものでした。<sup>11)</sup> そこには社会主義についての志向は全く見当りません。その点当時ロンドンでハーニーやジョーンズによって推進されていた革命的な労働階級の国際的な連帯運動がマルクスらを加えてその社会主義的目標を明らかにしていたのにくらべるとマッソーニやリントンの組織は対照的でした。リントンは前者の組織の社会主義的傾向にたいして批判的でした。

ゲルツェンはこのリントンともマッソーニとも親しかったのですが彼らの組織には加わりませんでした。リントンはその回想的記録『ヨーロッパの共和主義者たち (*European Republicans*)』(1893年)のなかでゲルツェンはその独特の社会主義的傾向(傍点・引用者)のために彼らの組織には加わっていなかったが、彼の心(heart)や活動は彼らを大いにたすけたと記述しています。<sup>12)</sup>

リントンは人道主義的な立場からイギリスに亡命してくるポーランド人たちの救済運動にも積極的で、そのために組織された国際的救済組織の委員会の総書記として当時ロンドンに亡命中のポーランド人指導者スタニスラ・ヴォーセル (Stanisla Worcell) たちをたすけて活躍しました。ゲルツェンはポーランド問題をロシアの解放運動と不可分の問題と考えてその解決にとり組んでいたのでこの点でも両者の関係は深まりました。1853年11月29日にロンドンで開かれた1830年のポーランド蜂起の23周年の記念集会をリントンが組織したことや、そこでゲルツェンが生れてはじめて公開演説を行ったことについては先に述べた通りです。

#### (四)

ゲルツェンはロンドン亡命後、リントンやマッソーニらを介してその国際的な運動に接近しましたが、他方ではチャーティスト運動の実力派の指導者として台頭したアーネスト・ジョーンズを介して前記の急進的な社会主義者たちの国際的組織にも一時接近します。

1854年8月にルイ・ナポレオンの政権下で捕えられていた革命家マルマン・バルベスが出獄し、ロンドンに渡来することになると、ジョーンズははじめイギリスの労働者たちのイニシアティヴでバルベスの歓迎とルイ・ナポレオンへの抗議をかねた国際的なデモンストレーションが企画されます。このために組織された国際的な委員会には

カール・マルクス、ヴィクトル・ユゴー、ルイ・ブラン、コシュートなどが名を連ねていました。ジョーンズの新聞『ピープルズ・ペイパー』の1855年2月3日号はこの国際委員会へのゲルツェンの参加希望の手紙をかかげています。そして同年2月26日にこの国際委員会によってロンドンのセント・マーティン・ホールでひらかれた1848年2月革命を記念する集会にはゲルツェンはジョーンズとともに出席しました。

ゲルツェンのアーネスト・ジョーンズとの接近とこの国際委員会への登場はジョーンズと親しかったマルクスにとってはなほだ心外なことでありました。すでにバクーニンとの対立関係にあったマルクスはその友人ゲルツェンの動向についても極めて警戒的でした。とりわけマルクスはゲルツェンがイギリスで出版した前記の諸論文のなかに汎スラヴ主義的な傾向を読みとって反発していたのです。当時マルクスはエンゲルス宛の手紙(1855年2月13日付)のなかで「ゲルツェンが国際委員会に割りこんだこと」(傍点・引用者)を問題にし、「僕はゲルツェンとはいつどこでもけっしていっしょに働こうとは思わないからだ。というのは、僕は、ロシア人の血で旧ヨーロッパが革新されうろという意見はもっていないからだ。」<sup>13)</sup>と記しています。もともとドイツ人嫌いのゲルツェンの側でもマルクスによる彼の国際委員会への進出の妨害が陰謀されたとしてこれに激しい敵意を燃しています。両者の対立の底には多分に感情的な誤解があります。しかし、本題からややはずれるので、ここではこの問題に深入りすることはいたしません。

当時の記録によれば2月26日のセント・マーティン・ホールの集会でのゲルツェンはロシア人代表としてもちまへの情熱をこめて国際的社会主義運動におけるロシアの歴史的役割について自説を展開したのですが、その演説は予定時間をはるかにこえる長広舌であったために彼につづく講演者たちの持ち時間にひどく食い込むことになりました。そのため次いで立ったイギリス代表のホウリオウク(G. Holyoake)はわずか数語しか語ることができず、そのあとのドイツ代表はついに登場すらできなかったということです。このゲルツェンにせよバクーニンにせよ西欧の社会主義運動のなかに登場した当時のロシアの先駆者たちの自己主張の激しさはロシアの革命的なインテリゲンツィヤの意気込みを示して面目躍如たるものがあります。

ゲルツェンはこの集会へのジョーンズの招待に気をよくして、すでに同年1月31日付のフランスの友人で歴史家のミシュレへの手紙のなかでそのことにふれていました。彼はその手紙の一節でイギリスにおける支配階級の当面している危機について記したあとで「だが、下にはおだやかで、陰気で、寡黙だが、頑固で根気強いチャーティスト運動と愛すべき外国人たち(政府からは我慢強い娼婦たちのように我慢させられ、

金持階級からは憎まれている亡命者たちはチャーティストたちの好みを利用している)……チャーティストたちは2月27日にフランス人たちといっしょに集会をもつべく集るでしょう。彼らは私に委員会のメンバーになるように招待しました。」<sup>14)</sup>と書き、フランス人とともにロシア人をも参加させた集会の意義について高く評価しています。しかし、マルクスはゲルツェンの参加を嫌って執行委員会には加わりませんでした。この集会のあとで新たに発足した国際委員会にはゲルツェンも委員としては登録されていません。当時クリミア戦争と「自由ロシア出版所」を通じてのロシアへの働きかけに忙殺されていたゲルツェンにとっては西欧における国際的運動のヘゲモニーをめぐる争いにはもはや二次的な関心しかもちえなくなっていたのでしょう。

ゲルツェンはリントンやジョーンズのようなチャーティストの指導者以外のイギリスの進歩的な人々とのつながりももっていました。たとえば、当時のイギリス政府の言論出版制限とたたかって投獄されたチャールズ・ブラッドロー (Charles Bradlaugh) とのゲルツェンとの交友関係に示す記録をブラッドローの娘が残しているそうです。

ついでながらこのブラッドローの逮捕と裁判をめぐるイギリスの労働者たちが繰りひろげた強力な抗議運動はゲルツェンに深い印象を与えたようです。彼はハイドパークに集った10万人をこえる労働者の抗議集会を眺めて、その整然たる行動に感銘を受けミシュレ宛の手紙(1855年7月8～9日付)のなかで「新聞を決して信用しなされるな、これは非常に真剣で重要な運動です」<sup>15)</sup>と書き送っています。彼はまたこの集会のために動員されている警官の数の600人という少なさにもおどろかされたようです。それらはいずれも彼の母国ロシアでは当時想像もできないことであったからです。

ブラッドロー以外にもゲルツェンは当時のイギリス政府が強行しようとしていたスパイ取締法案 (Conspiracy Bill) に反対して活躍していた自由思想家ミルナー・ギブスン (Milner Gibson) やゲルツェンの出版活動についての最初の紹介と評論をかかげた雑誌『アスニアム (*The Athenaeum*)』の編集者であり、後にチェルシー地区選出の国会議員となった共和主義的思想の持主チャールズ・ディルク (Charles Dilke) などとも交際がありました。

さらに、ゲルツェンとの交際があった注目すべきイギリス人としてはニュー・カースル出身の国会議員で急進的政治家として知られるジョウジフ・カウイン二世 (Yonger Joseph Cowen, 1829—1900) をあげねばなりません。この人物とゲルツェンとのつながりについてはパートリッジ教授はとくに独立の論文を書いて紹介しています。



エディンバラ大学に在学中から進歩的な政治運動に参加していたカウインはその雄弁とエネルギーな活動力によってニュー・カースルの町を19世紀の半ばのイギリスにおける労働運動や革命的宣伝の中心地としたといわれます。彼の政治活動の重要な一面は海外からの政治亡命者たちの支援ということでした。彼は父親以来の家業としていた海運業を利用して、ポーランドやハンガリーやイタリヤの亡命家たちを助けて、彼らの非合法文書などを一般の積荷にかくして海外に送り出すことにも協力しました。

カウインにゲルツェンを紹介したのもリントンであろうとパートリッジ教授は推測しています。リントンのブラントウッドの印刷所の設立をカウインが援助していることや、両者ともにポーランドの亡命者たちの救済に尽力していることからこの推測はかなり確実だと思われます。パートリッジ教授はニュー・カースルのアルヒーフでゲルツェンとカウインの交渉を示す幾つかの資料を見つけています。ブラントウッドのリントンの印刷所からのゲルツェンの出版物やゲルツェンとカウインとの間に交された手紙もふくまれているようです。

以上のことからさらに想像されることは、カウインを通じてゲルツェンの「自由ロシア出版所」の印刷物がロシアの港に秘かに運び込まれたのではないかということです。しかし、この推測を裏づけるような確実な資料はパートリッジ教授も示してはおりません。もしこの推測を裏づけるようなより重要な証拠資料が見つければ、ゲルツェンの「自由ロシア出版所」の刊行物がどのようにして当時イギリスからロシア国内に多量に持ち込まれ得たかについての疑問の一つが解かれることになりますし、ロシアとイギリスの文化的交流史の上での興味深い裏面の一頁が明らかになることでしょう。

#### (五)

以上のようにゲルツェンの滞英期間中のイギリス人との交流関係について従来彼の『過去と思索』のなかに公表されなかった事実が主としてパートリッジ教授の努力によって資料的に明らかにされつつあります。これらの資料にもとづいて私たちにはあらためてゲルツェンとチャーティストとの関係を中心とした当時のイギリスとロシアとの社会運動の関連について思想的にも考察する可能性がひろがってきました。私自身がイギリスにおいてゲルツェンとリントンとの関係についていささか資料的な調査を試みたのもそのためでした。しかし、私にとってまだその作業は完了しておりません。最初に述べたようにこれはその中間報告としてとりあげているつもりです。

さて、以上のような事実を立てあらためて浮ぶ素朴な疑問は、なぜゲルツェンが上述のようなイギリスにおける友人や知人たちとの交渉を彼の回想録的作品のなかでとりあげなかったのだろうかということです。

この点に関してはパートリッジ教授は、第一にゲルツェンがその『過去と思索』を書いたのは単なる回想記としてではなく、同時代のヨーロッパやロシアの読者にたいして自己の思想に訴えるべく書いたのであり、そのためには国際的に知られた人物についての自分との交渉を書くことが効果的だと考えたからだろうとしています。<sup>16)</sup> 言いかえれば、ゲルツェンがとりあげたカーライルやオウエンにくらべて他のイギリスの友人、知人たちはイギリス国内ではともかく国外ではあまり知られていない人々であったことを理由の一つとしています。

もう一つの理由としては、パートリッジ教授はそのカウインとの関係についての論文の結論として、カウインについてゲルツェンが『過去と思索』に書かなかったのは当時ゲルツェンの政治活動のネットをひろげるのを助けていたこのような人物との関係について公表することを政治的に警戒しなければならなかったからだと推測しています。<sup>17)</sup> それにくらべればカーライルやオウエンはゲルツェンが彼らとの関係を公けにしても別に政治的に危険なことのない性質の思想家たちだからだということです。たしかに、オウエンは当時すでに年老いて影響力を失っていました。当時のロシア政府のゲルツェンの動向についての警戒ぶりや、当時の保守の政府のチャーティストたちへの対応ぶりからして、ゲルツェンが亡命政治家としてその交渉について内容を公表しようとしなかった政治的配慮は理解できます。しかし、私はそれだけの理由に尽きないと考えています。

## (六)

以上のことに関連してゲルツェンのイギリス社会についての印象とその評価、およびイギリス滞在の思想的影響について若干ふれてこの報告を終えたいと思います。

ゲルツェンが1848年に味わった西欧のブルジョア社会体制への幻滅感はその頃を中心に書かれた文集『向う岸から (Из того берега)』のなかで彼独自の深刻さをもって鮮かに描かれています。それは同じ年にあらわれたマルクスの『共産党宣言』やJ. S. ミルの『経済学原理』と並んでこの時代の精神を示す記念碑的な作品でありました。しかしゲルツェンのそれが他の二人のそれと違う点はまず全体を貫く彼の西欧における社会発展と人間の自由の相克についての極めてペシミスティックな見通しと、ポーランドの学者A. ヴァリッキエーも指摘しているように資本主義体制の経済学的分

析視角の欠如をあげることができるでしょう。<sup>18)</sup> ゲルツェンのブルジョア社会批判は後のナロードニキのそれとも違って、なによりも貴族的精神の高みからする商業社会の精神的卑小さ、頹廃への人間的批判として行われました。

アメリカのゲルツェン研究家マーチン・マーリアはゲルツェンの思想の基調にはJ. S. ミルに通ずるものがあり、また、人類の全面的解放を目指す点ではマルクスにも共通しているとかって指摘しました。<sup>19)</sup> しかし、思想的にはともかく彼にはカーライルの反俗的な批判精神には好感をもち、また一方、ロバート・オウエンのユートピア思想に強烈な道徳的共鳴を感ずるという傾向こそが特色でした。<sup>20)</sup>

当時のイギリスではチャーティスト運動は峠を越してゲルツェンの表現によれば「年ゆかずして老衰して」いました。イギリスのみならずヨーロッパ全体をブルジョアジーの勝利に伴う反動の波が蔽っていた時期です。ゲルツェンは『過去と思索』の第六部のイギリス論の付録として収録したJ. S. ミルの「自由論 (On Liberty)」についての論評でイギリス社会のブルジョア化にともなう小市民的精神の支配によってミルが試みている高貴な人間精神の復活へのよびかけはすでに無意味となったと断じています。彼によればミルの試みはすぎ去ったクロムウエル時代の英雄的精神の再興を現代のイギリスに期待する一種のアナクロニズムとみなされるのです。それにくらべて同じ第六部の「ロバート・オウエン」の章でのオウエンへの熱烈な支持は、それがブルジョア的な現体制の根本的な変革の必要性を主張しているからでした。世論の中で孤立しながら人類の未来について共産主義的な「千年王国」の夢を語りつづけるオウエンに彼は強い共鳴を感じています。

彼のそのような見地からすればヴィクトリア朝のイギリス——とりわけ商業都市ロンドン——の空気は到底なじみ得るものでありませんでした。彼はここで「チーズのなかの虫」のようなやり切れなさを感じ、そのためかしきりに住居の移転をくりかえしました。

ゲルツェンはわずかに労働者たちの運動のなかにイギリスにおける自由な精神の最後の抵抗を見ていたといえます。彼のイギリス論のなかには次のような言葉があります。

「イギリスの労働者が自分の社会的問題をどのように提起するかはわれわれにはわからないが、彼の牛のような頑強さは偉大である。彼の側には、数の上での多数はあっても力はない。……」

イギリスにおいても人民が、農民戦争の時代のドイツや、六月の日々のフランスにおけるようにうち砕かれてしまうならば、そのときには、スチュアート・ミルによっ

て予言されたシナは遠くない。……」<sup>21)</sup>

彼はチャーティスト運動の衰退期のなかで、大衆運動のもつ政治的無力さと同時に、彼らの運動の存在意義について彼なりに確認していたのです。

当時のゲルツェンの論文のなかには議会制度についての否定的評価もあらわれています。1851年の論文『ロシア民族と社会主義』のなかで彼は西欧にとってそれは一時的救済、または力なき防壁にすぎないものだ<sup>22)</sup>と書いていますし、1853年のロンドンでのポーランド蜂起23周年記念集会の席上の演説のなかでも西欧における議会政党の存在は西欧においても過渡的な意味しかないし、ロシアにとっては全く意味がないと述べています。このような彼の見地からは労働者階級の参政権を要求の中心においていたチャーティスト運動の運動目標自体には強い関心を持ち得なかったのではないかと考えられます。

当時のゲルツェンは思想的なためとしては社会主義をかかげながらその内容はロシアの農村共同体を基盤とする独得のものでしたし、運動の方式としては大衆的な革命運動には概して懐疑的なのが特色です。ロシアの農民のプガチョーフ以来の反抗についてゲルツェンはしばしば語っていますが、それは多くの場合、地主貴族にたいしてその脅威を強調することによって警告したに過ぎません。彼が改革運動の実際の担い手とみなしていたのはロシアにおいては貴族階級の良心的な層でした。その意味で彼は当面の変革に当って自由主義的な立場の人々をふくめた知的エリート層の連帯を重視しました。1850年代の後半から差し迫ったロシアの農民解放の運動方針をめぐる60年代を代表する急進的な平民インテリゲンツィヤの指導者たちと彼がしばしば意見の対立をみたのも一つにはゲルツェンの属する貴族階級の歴史的評価をめぐる見解の相違や、改革運動の方式や西欧の社会的発展の評価についての対立があったためでした。<sup>23)</sup> 西欧に関しては彼は労働者階級を唯一の革命的階級とみなすと語っていますが、その現実的な政治的能力についてはいまだに悲観的な評価しかもっていなかったといえます。この頃のゲルツェンにはマルクスやアーネスト・ジョーンズらが推進していた西欧中心の社会主義的な国際的労働者運動にも、リントンらの共和主義運動にもまだ積極的に取り組む姿勢は整っていなかったと考えられます。

概して否定的なイギリス社会へのゲルツェンの批評のなかで彼がとりわけ評価しているものとしてはこの国における言論、出版、集会の自由とそれを支えている大衆的な運動や裁判制度をあげることができます。彼のイギリスにおける知人たちがいずれもこの問題についての熱心な運動家たちであったことはすでに述べた通りです。『過去と思索』のなかのイギリス論では《Not Guilty》という一章を設けて彼が実際に見

聞したロンドンでの政治事件の裁判について書いています。そのなかで彼はフランスにおいて経験した同様な裁判の結果と比較してイギリスの裁判がいかに公正であったかについて一種の畏敬の念をこめて記しているのです。彼は別の章でイギリスの警察制度にも言及していますが、そのなかで、イギリス以外では彼にとって嫌悪と警戒心をひきおこした警察官がイギリスではある種の安心感を増すだけであったと記しています。このようにゲルツェンにとってイギリスにおける体験は次第にこの国における市民的自由の問題に注目させたといえましょう。彼の生涯における最大の事業であった「自由ロシア出版所」の設立と運営も、『過去と思索』の執筆もこのイギリスにおいてはじめて実現し得たことでした。約半世紀後にロシアからこの国に政治的な活動の自由を求めてやってきたレーニン夫妻も、ゲルツェンと同様、この国の小市民的精神に反発しながらもそこで母国では想像もできない活動の自由の恩恵に浴したのです。

ゲルツェンの12年余におよぶロンドン滞在とその間の体験が彼の見解の上に変化をもたらした点も見逃し得ないことでしょう。彼がイギリスを去る直前の1869年夏に書いたバクーニン宛の有名な手紙『古い同志への手紙』はそのような影響を示す好例といえます。

この手紙の冒頭でゲルツェンは「動機というものはいかに充分なものであろうとも充分な手段がなくてはそれだけでは現実的なものたることはできない」<sup>24)</sup> というベンサムという言葉をかかげてバクーニンが主張する無政府主義や暴力革命の思想に反対して社会変革における現実的な漸進主義的方法を肯定し、政治的変革にたいする経済的変革の優位を説き、既存の国家制度の全面的破壊という思想に対してはラッサールの名を引用してむしろその有効な利用の必要を主張します。そしてここで古い世界の変革の担い手としてはじめて国際的な労働者の連帯組織の成長に期待する言葉を述べています。このようなゲルツェンの思想的転換をすべてイギリス滞在中の体験からの影響に帰結させることはできないにせよ、時期的にいてもこの手紙が彼にとっての長いイギリスにおける体験の思想的総括であったということはできると思います。そのような意味でも彼のイギリスにおける諸体験は従来とりあげられることの少かったチャーティストとの交流や国際労働運動との接触をふくめて思想的に再検討する必要があると思われます。パートリッジ教授の諸研究はそのような研究にとっての手はじめとしての素材を提供したものとして評価するべきでしょう。

## あ と が き

ゲルツェンの歿後 100 周年にあたる1970年に私はたまたまロンドンのウェストボー

ン・テラスにあるゲルツェンの旧居オーセツ・ハウスを訪れました。<sup>25)</sup> その白亜の建物の外壁にはロンドンのシティ・カウンシルがこの建物をゲルツェンとの縁で市の歴史的記念建造物に指定したことを示す真新しい記念銘がはめこまれていました。また、100周年のこの記念銅板のとりつけに因んでかつてゲルツェンも在英中にその読者であった『ザ・タイムス』はそのロンドン版の頁に「ロシアの偉大な息子」と彼を呼んだ記事を掲げました（写真参照）。その記事の結びには E・H・カー教授のゲルツェン評と思われるものからの引用を交えた次のような言葉が記されていました。

## London salute to Herzen, a great son of Russia

An elegant white, porticoed house in a quiet street not far from Paddington station was festively peopled yesterday with nineteenth-century Russian ghosts. The occasion was the unveiling of a blue plaque to mark the fact that Alexander Ivanovich Herzen, the exiled Russian liberal philosopher lived from 1804 to 1863 at 1 Orsett Terrace, just off Westbourne Terrace.

The ceremony was performed by Mr. Smirnovsky, the Soviet Ambassador, who described Herzen as "a son of Russia, a Russian patriot, a great author, philosopher and revolutionary, whose writings have made a profound impact upon the political life of several generations". In this house Herzen was visited by Tolstoy, Turgenev, Dostoevsky and Bakunin. Mr. Smirnovsky expressed gratitude to the Greater London Council and to *The Times* for sponsoring the erection of the plaque.

The ambassador said Herzen belonged to a group of outstanding Russians who had made a tremendous contribution to Russian and world literature. Herzen had lived about 12 years in London, establishing a Russian free press and issuing works against serfdom.

In London he had written the greater part of his indispensable *My Past and Thought*. His writings and activities were highly praised by Lenin. Herzen was a keen observer of the British scene and had great respect for the British people.

Mr. C. D. Hamilton, Editor in Chief of *Times Newspapers*, traced the sequence of events behind the plaque, beginning with a leading article in *The Times* of January, 1962, suggesting that the London County Council should erect a plaque.

Mr. Hamilton said it was thought there should be a plaque because to many other houses connected with Russian exile in London were no longer standing. "We are very

grateful that the Greater London Council have taken up our suggestion for a plaque."

He pointed out that Herzen was a reader of *The Times*, as well as editor of his own newspaper.

Lady Dartmouth, chairman of the G.L.C. Historic Buildings Board, said Turgenev "who many times visited here, is my favourite author". She added: "One wonders whether perhaps he gained some inspiration from coming here and from his friendship with Alexander Herzen."

In a reference to the links between the house—now owned by Lieutenant-Colonel and Mrs. W. K. T. Harrett—Herzen and the other great Russians, Lady Dartmouth said that many of the famous Russian novelists had contributed much to intellectual nobility and world literature.

Among the guests yesterday was Dr. E. H. Carr, fellow of Trinity College, Cambridge, former assistant editor of *The Times* and author of many historical works.

As the leading article in *The Times* advocating a plaque on the house in Orsett Terrace put it: "Readers of Professor E. H. Carr's *The Russian Exiles* will readily recall that the domestic arrangements were not of the simplest."

Herzen was living with Natalie, the wife of his friend Ogarev, who was not deterred from staying on in the house and Natalie had recently given birth to twins when Bakunin burst in from Siberia with his healthy belief that it was bad to be lying down when there were revolutions to be started on.

But Herzen's temperament was poles apart from that of the celebrated Russian anarchists. Herzen remained the liberal, the theoretician, the believer in progress through public education, the democrat.

*London Daily, page 11.*

*The Times* (London), 24th Sept. 1970. の

ゲルツェンに関する記事

「しかしながら、ゲルツェンの気質は著名なロシアのアナーキスト（訳注……バクーニン）のそれとは全く反対であった。「ゲルツェンはあくまで自由主義者、理論家、公けの説得を通じての進歩の信仰者、民主主義者であった」。

このゲルツェン評のなかにはいかにもイギリス人らしい視角を感じさせるものがあります。イギリスの研究者の間でもゲルツェンはいまだに忘れ去られた存在ではありません。キール大学のラムパート教授 (Professor E. Lampert) の1957年の著作をあげるまでもなく、最近の『過去と思索』の英訳の新版に序文をよせているオクスフォード大学のアイザイア・バーリン教授 (Sir Isaiah Berlin) のもとでは若い研究者がゲルツェンの研究にいそしんでいましたし、ノッティンガム大学ではパートリッジ教授がゲルツェンの伝記を執筆中とのことでした。

わが国において最近ゲルツェンについてのすぐれた研究があらわれていますが、<sup>26)</sup> イギリスにおけるゲルツェンの活動の思想についてはまだこれから研究さるべき問題が多いように思われます。

注 1) 当日の報告は岩間徹先生の司会のもとに行われ、その要旨は日本西洋史学会編『西洋史学』XC、1973. p.52 に収録されている。古賀秀男氏はじめ当日会場で有益な教示をくださった方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

2) ゲルツェンとオガリョーフのイギリスにおける亡命生活についての若干の資料については本誌第10号 (1972年) 所収の拙稿「イギリスにおけるゲルツェンとオガリョーフ——イギリスにおけるその研究者たち、資料、旧居についての調査報告——」を参照されたい。

3) パートリッジ教授のこの問題についての労作としては次の三点がある。

M. Partridge, "Alexander Herzen and English Press" 1953. "Alexander Herzen and the Younger Joseph Cowen, M. P., Some Unpublished Material" 1962. いずれも *The Slavonic and East European Review* に発表された。および M. Парtridge, "Александр Герцен и его английские связи" в *Проблемы изучения Герцена* Изд-во АН-СССР. М. 1963. (ソビエト科学アカデミー編、『ゲルツェン研究の諸問題』所収「アレクサンドル・ゲルツェンと彼のイギリスとのつながり」1963年)

4) ハクストハウゼンのロシア農村調査にもとづく報告は第一巻が1847年に第二巻が1852年にそれぞれドイツ語で出版されたが、英訳版第一巻の出版は1856年である。ゲルツェンは1843年にロシアでハクストハウゼンに会う機会があった。

5) たとえば『アスニーアム (*The Athenaeum*)』誌、1855年1月6日付の論評、編集者ディクソンとワッツ (W. H. Dixon, T. Watts) はゲルツェンの諸論文に関心を示し、英語で発表された二論文以外の「自由ロシア出版所」からのロシア語パンフレット『ユーリーの日、ユーリーの日——ロシアの貴族たちへ——』の一部分も引用してその内容に批判的なコメントをつけている。また保守系の雑誌『ジョン・ブル (*John Bull*)』や『コルバーンズ・ニュー・マンズリー・マガジン (*Colburn's New Monthly Magazine*)』、『リテラリー・ガゼット (*The Literary Gazette*)』などはゲルツェンに批判的でその社会主義的傾向や共和主義的傾向を嘆いたという。そのうちでも『リテラリー・ガゼット』はその1855年10月20日の論評の結びで「この国での彼 (ゲルツェン—訳者註) の経験は軍事的な専制主義をくつがえすために民主的な無政府主義の宣伝をする必要はないということを教えてくれたであろう」と批評している。

Cf. M. Partridge, "Alexander Herzen and the English Press", in *The Slavonic and the*

- East European Review*, vol. XXXVI, No. 8. June 1958, pp. 455-456 and pp. 467-468.
- 6) W. J. Linton *Memories*, London, Lawrence and Bullen, 1895.
- 7) Asa Briggs, ed. *Chartist Studies*, London. 1959. pp. 96, 97, 236.  
M. Beer, *A History of British Socialism*, Vol. II, p. 166 (Reprint 1953). なお古賀秀男「チャーティストと共和主義——G. J. ハーニー論との関連において——」参照。
- 8) M. Partridge, *op cit.* p. 455.
- 9) (註2) pp. 11~12、参照
- 10) この「人民国際連盟」の目的としては次のことが掲げられた。  
「イギリスの公衆を海外諸国との政治的諸条件や諸関係に関しし啓蒙すること。  
民族の自由や進歩の諸原則を宣伝すること。  
すべての人民が自己の政府をもち、かつ己自身の国籍を保持する権利のために有効な世論をおこし、宣言すること。  
すべての国の人民の間のよき理解を増進すること。」  
この連盟のイギリスからの参加者にはリントン以外にもトマス・カーペンター、リチャード・ムア、ヘンリー・ヴィンセント、ジェイムス・ワトソンなどかつての「ロンドン労働者協会」の中心的なメンバーが見られる。Cf. W. J. Linton, *op. cit.* pp. 98~101.
- 11) W. J. Linton, *European Republicans, Recollections of Mazzini and his friends*, London, 1893. Appendix pp. 343-344.
- 12) *ibid.*, p. 243.
- 13) マルクス・エンゲルス全集・邦訳・大月書店版 第28巻348ページ。
- 14) А. И. Герцен, Собр. соч. в тридцати томах. том XXV. стр. 232.
- 15) Там же. стр. 277.
- 16) М. Парtridge, “Александр Герцен и его английские связи”, стр. 368.
- 17) M. Partridge, “Alexander Herzen and the Younger Joseph Cowen, M. P. Some Unpublished Material,” in *The Slavonic and East European Review*, vol. XLI. 1962. p. 63.
- 18) A. Walicki, “Russia” in *Populism—Its meanings and national characteristics*, ed. by G. Ionescu and E. Gellner. London. 1970. p. 168.
- 19) M. E. Malia, “Herzen and the Peasant Commune” in *Continuity and Change in Russian and Soviet Thought*, ed. by E. J. Simmons. 1955. pp. 214-215.
- 20) 拙稿「ロバート・オウエンとロシアの思想家たち」。経済学史学会第36回大会報告（1972年11月11日、於松山商科大学）、『季刊・社会思想』第3巻第3—4合併号に所収
- 21) А. И. Герцен, Указ. соч. том. XI. стр. 76, 金子訳『過去と思索』II、p. 271.
- 22) А. И. Герцен. Указ. соч. том. VII. стр. 309.
- 23) Cf. Yoshio IMAI, “The London Meeting of Herzen and Chernyshevsky, in June 1859.” (工学院大学研究論叢、第8号所収)
- 24) А. И. Герцен. Указ. соч. том. XX. стр. 575.  
邦訳、金子幸彦訳、『世界大思想全集』河出書房刊、第27巻191ページ。
- 25) 拙稿「イギリスにおけるゲルツェンとオガリョーフ」（工学院大学研究論叢、第10号所収）pp. 16~22参照
- 26) 外川継男、『ゲルツェンとロシア社会——ツルゲーネフおよびバクーニンとの論争によせて——』、東京・お茶の水書房刊1973、長縄光男「イタリアのゲルツェン（1847年11月



今 井 義 夫

～1848年4月)』『思想』、東京・岩波書店刊、1973年6月号、所収、; 加藤史朗「ゲルツェンと《コーロル》」、『史観』第84冊所収。池庄司敬信「A. H. ゲルツェンの政治思想」、『法学新報』第67巻第11号、その他。

(いまい よしお 本学助教授 経済学・社会思想史)